

東京YMCA 11.12

2021年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

インターナショナル・チャリティーラン 1072人で1億歩 = 地球1.8周達成



＜参加者からの投稿写真＞

上段右＝富士フィルムビジネスイノベーション株式会社 端数倶楽部

上段中＝三菱商事株式会社 上段左＝東京YMCA高等学院

下段右＝個人参加者

下段中＝米NY州フロストバレーYMCA

下段左＝東京YMCA社会体育・保育専門学校

【2021年度 参加・協賛企業・団体】

●全国協賛

・三菱商事株式会社

●全国賞品協賛

・キャセイパシフィック航空日本支社

・マテル・インターナショナル株式会社

・特定非営利活動法人アンリッシュ・ポテンシャル

・デサントジャパン

●参加・協賛一覧

・カーギルジャパン合同会社

・富士フィルムビジネスイノベーション株式会社

・上田八木短資株式会社

・岡谷エレクトロニクス株式会社

・U i P a t h株式会社

・YMサービス株式会社

・東京ワイズメンズクラブ

・東京世田谷ワイズメンズクラブ

・ワイズメンズクラブ国際協会東日本区在京ワイズメンズクラブ

・ライオン株式会社

・京王電鉄株式会社

・国際青少年センターYMCA東山荘

・株式会社恵愛

・チームHGR

・西東京コミュニティーセンター

・山手コミュニティーセンター

・江東センター・江東YMCA幼稚園・東京江東ワイズメンズクラブ

・東陽町コミュニティーセンター

・東京YMCAインターナショナルスクール（T Y I S）

・しののめYMCAこども園

・東京YMCA国際ホテル専門学校

・東京YMCA野外教育事業部

・東京YMCA l i b y・高等学院

・東京YMCAにほんご学院

・東京YMCAウエルネス東陽町水泳クラス

・東京YMCA社会体育・保育専門学校

・DREAMクラス

・東京YMCA役員・評議員・本部職員



障がいのある子どもたちの支援を目的に30年余にわたって開催している「東京YMCAインターナショナル・チャリティーラン」は今年もまた、新型コロナウイルスの影響により、大会に替えて開催しました。スマホアプリで歩数をカウントしながら、それぞれの場所を歩き、歩数を競うルールで、10月16日、22日は個人参加、10月23日、31日はチームレースと、計16日間にわたって開催。参加者総数は1072人。歩数総計は昨年度より1千万歩以上増えて1億577万9925歩。1歩を70センチメートルとして距離に換算すると7万4046キロメートル。およそ地球1.8周を歩いた計算となりました。

障がいのある子どもたちも参加。ご家族からは「子どもと一緒に歩数ランキングをチェックしながら歩いた。いつもの散歩に張りが出て楽しかった」という感想がある一方で「やはり皆で集まる駅伝大会の方が楽しい」というご意見もいただきました。

事務局スタッフはレース初日、都立本場公園にフオースポットを設置。30組80人の方がお越しください、青空の下で笑顔の撮影会ができました。またウォーキング中の写真やエピソードの投稿を呼びかけたところ、横浜や千葉、埼玉など各地の写真が寄せられ、ホームベージュは色とりどりの秋の風景でにぎわいました。

「会」という声がある一方で「駅伝には参加できないがウォーキングなら参加できる」という声もあり、コロナ後の大会については検討が必要ですが、来年もまた皆さまにお目にかかれそうです。引き続きのご支援ご参加をお願いいたします。



投稿写真や参加チーム紹介、レース結果など詳細はホームページをご覧ください。

<http://tokyo.ymca.or.jp/support/charityrun.html>

赤△三角

「グランチャ東雲」は東京YMCAが指定管理者として運営している江東区児童・高齢者総合施設で、YMCAが培ってきたノウハウを活かした健康プログラムや地域プログラムを実施している。特に、認知症予防のために身体と頭の両方を使う体操などは、誰でも簡単に楽しくできると好評である。▼今秋、新型コロナウイルスが少し落ち着いてきて、ようやく通常の運営に戻りつつあるが、久しぶりに来館する高齢者の中には、体力や認知機能が低下した方も見受けられる。この2年間で亡くなられた方も多い▼高齢者が活動する機会が減少してしまつたことは、非常に重大な問題を含んでいる。人との会話、地域社会との接点の減少もメンタル面に影響を孕んでいる。ささいなことから利用者のトラブルが起きることも増えた。まさにコロナで抑圧されていたものが一気に爆発したようにも見える▼東京YMCAは「世界を見つめ地域に生きる」という目標語を作り、YMCA運動を進めてきた。互いを認め合い、高め合う「ボジティブネット」のある豊かな社会を創るには、正しく世界を見つめ地域に根差して生きていく「本当の覚悟」が必要である。（グランチャ東雲 菅原成臣）



会員協議会「ソシアス2021」 「会員活動の活性化」考える

年に一度、会員・職員がYMCAについて考える会員協議会「ソシアス2021」が、11月13日に開催されました。昨年はオンラインでの開催でしたが、今年はコロナの感染も落ち着いてきたため、東陽町センターでの会場参加かオンラインかを選択できるハイブリッド型で開催。会員職員50人が参加しました。

今年のテーマは「会員活動の活性化に向けて」。ここ数年、会員数が伸び悩んでいる現状をふまえ、あらためて会員制度について考えました。協議にあたり、まず中里敦会員部統括から「これまでの会員のあり方を振り返る」と題し、140年の歴史における会員制度の変遷について紹介。創立当初はクリスチャンの男性に限定されていた会員対象者が、事業内容と共に拡大されて

きた歴史を学びました。続いて会員部運営委員長の上田晶平さんから、現状の課題について問題提起があり（Ⅱ左枠）、その後約1時間半の分団協議を行いました。

分団発表の後、菅谷淳総主事は「今後もYMCAが多くの人に選ばれる魅力的な団体であり続けるため、今日の意見をしっかりと受け止め、次年度の運営方針に取り入れた」と述べ、これからも会員職員が力を合わせて運営していくことを誓って閉会となりました。

(広報室)

＜分団で出された主な意見＞

＜会員制度の問題＞

- たとえば学生ボランティアや寄付者については、「学生会員」など区分を増やし、会員として位置付けはどうか。会費納入にこだわらず、YMCAに賛同する人たちを広く会員として認め、「アソシエーション」の対象枠を拡大してもいいのではないか。
- 会員の活動領域を「会員部」に限定せず、事業領域にも関わる体制にできないか。YMCAらしい特色ある事業展開には、会員のサポートが欠かせない。
- 会費の使途が複雑でわかりにくい。会員増強の際にも説明が難しい。「見える化」が必要。

＜会員活動の意義＞

- 会員になっても、会費を払うだけで、具体的な活動の場がない。会員とは何か、わかりにくい。
- 以前のYMCAは、障がい児者の活動を新しく創るなど、社会的課題に先駆的に取り組んできた。今は社会的な存在価値が弱まっているのではない。社会に必要とされる意義ある活動が展開できなければ、賛同したいと思う会員は増えていかない。
- 社会問題について考える講演会を開くなど、もっと社会課題について発信してはどうか。課題意識のある会員が集まって新規プログラムを開発し、社会的チャレンジをしていくのがYMCAではないか。
- まずは「YMCAに参加して良かった」「楽しかった」と言われる良質なプログラムを提供することが、会員登録への第一歩になる。その上で、活動に参加した人が、やがてYMCAを支援したい、賛同者になりたいと思ってもらえるような「道筋」を明確にすることが、会員増強の基盤になる。

＜広報活動について＞

- YMCAの知名度が低くなっている。SNSを駆使するなどして、情報発信力を高める必要がある。
- 会員制度について各会館でも展示するなどして、もっとアピールすべき。

＜東京YMCA会員制度の現状と課題＞

会員部運営委員長 上田 晶平さん 発題要旨

東京YMCAは1880年、会員によるアソシエーションとして設立。活動の拡大に伴って職員を雇用したが、あくまでも主体は会員だった。その後、専門学校など事業が拡大し、職員数も増えていったが、組織としての意思決定は会員から選ばれた「常議員会」によって行なわれていた。また各事業には会員による運営委員会が設置され、職員と会員が「車の両輪」となって運営してきた。

けれども2003年、事業悪化により神田会館を売却した際、事業の責任主体を明らかにする必要が生じたことから会則を変更。会員の活動は「会員部」に集約され、それ以外の事業には関与しない体制となった。2011年に公益財団法人へ移行した際には「常議員会」も廃止され、会員による活動と職員による事業とが、明確に分離されるに至った。

以来、会員数は1000人前後を推移。ここ数年は900人ほどに留まっている。現在、会員になっている方の動機を大きく分類すると、幼稚園やキャンプなど何らかの活動をきっかけにYMCAに賛同した人、クリスチャンとして団体の主旨

に賛同した人、青少年を育てたい、社会をよくしたい等の使命感をもって関わっている人などさまざまであるが、新たな会員はなかなか増えていかない。他のNPOと比べて会費の使途が複雑なことも、訴求力の弱さの一因となっている。結果として会員層の高齢化が進み、主体的に活動を支える会員が減少。活動も内向きになるなど課題が生じている。

一方でYMCAには、会費は払っていないがボランティアとして活躍している人たちや、寄付によって活動を支える人たちもいる。いずれもYMCAにとって欠かせない存在であるが、会員ではないため組織化できていないという課題もある。また各事業分野でも、専門知識をもつ会員層が必要となっているが、こうした人材も集められていない。

より多くの人がYMCAの会員となり、今後もYMCAが地域ニーズに合った活動を展開していくためにはどうしたらいいか。会員制度について、また会員活動のあり方について考えるべき時期がきているのではない。会員諸氏のご意見をうかがいたい。



総主事カフェ

東京YMCA総主事 菅谷 淳



総主事カフェようこそ

コロナ対応で大変だった2021年ももうすぐ終わります。今年1年、総主事カフェにお立ち寄りいただいた皆様にアメリカの昔話「クリスマスの鐘」をプレゼントします。

アメリカのとある町に、大きな教会がありました。

その教会の鐘には「クリスマスの夜に、神さまに素晴らしい贈り物をすれば鳴る」という言い伝えがありましたが、まだ一度も、この鐘が鳴るのを聞いた人はいませんでした。

さて、この町のはずれの小さな村に、ペドロという男の子と弟がいました。

二人はクリスマスにこの教会に行くことを楽しみにしていました。

待ちに待ったクリスマスの前の夜、二人は町へ向かいましたが、

町の入口に、女の人が倒れているのを見つけました。

ペドロはポケットから銀貨を取り出すと、弟に差し出しました。

「この銀貨は、神さまへの贈り物だよ。ぼくはこの人を助けるから、一人で行って銀貨を届けて」「えっ、ぼく、一人で行くの?」「大丈夫。さあ、行っておいで」

弟は仕方なく一人で町の中へ入っていきました。

教会の中は、たくさんの人で賑わっていました。どの人も神さまへの立派な贈り物を得意そうに抱えていました。目がくらむような宝石、山のような金貨、銀の食器。誰もが自慢の贈り物をして鐘を鳴らそうとしましたが、いっこうに鐘は鳴りません。

最後に王さまが最も大事にしている金の王冠をささげました。みんなはじっと耳を傾けましたが、鐘はシーンと静まり返ったままです。

「信じられない、王さまの金の冠でもだめなのか」人々があきらめていたその時です。

「カラーン、コローン、カラーン、コローン」突然、塔から美しい鐘の音が響いてきました。

「あっ！鳴った。とうとう鳴ったぞ!」「なんて、美しい音色なんだ」「それにしても、鐘を鳴らすほどの贈り物をしたのは、いったい誰だろう?」、人々はいっせいに振り返りました。

するとそこにはペドロの弟がぼつんと立っていました。

「ぼくはただお兄ちゃんから預かった銀貨を一枚神さまに捧げただけだよ」

素晴らしい贈り物というのは、高価かどうかではありません。相手を思う純粋な心が贈り物に込められていることが大切です。YMCAの運動や活動の一つ一つが、ペドロの銀貨のように人々の心に感動の鐘の音を鳴らすことができるといいと思います。クリスマスを迎えて神様が私たちにプレゼントして下さった愛にもう一度感謝するとともに、私たちの愛を隣の人にも分けていきたいと願います。素敵なクリスマスと希望に満ちた新しい年をお迎えください。

世界YMCA/YWCA 合同祈禱週礼拝に75人参加

YMCAとYWCAは毎年11月第2週を「合同祈禱週」とし、共に祈りの時を過ごしています。今年の世界共通テーマは『「こわれたものからの美しさ」』。コロナ禍で多くのものが失われた状況を受けて世界YMCAとYWCA両会長からは、聖句「四方から苦難を受けても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず」（第二コリント4章7節）と共に「壊れたものを癒し、他者に手を差し伸べる光となる」とのメッセージが発信されました。

東京YMCAは11月11日、在日韓国YMCAと東京YWCAとの共催で「合同祈禱週礼拝」を開催。渡辺俊彦氏（上馬キリスト教会牧師・東京YMCA医療福祉専門学校講師）から説教をいただきました。オンラインだけでなく、東京YWCAホールでの会場参加もあり、75人が参加。久しぶりの再会を喜び合う時となりました。

(広報室)

行事再開 ～元気な園児たち

緊急事態宣言が解除された秋。各園では感染対策を工夫しながらも、久方ぶりの行事を楽しみました。



Y M C A 保育園ねがい

運動会の代わりに、園庭で「ファミリースポーツデー」を開催。久しぶりに親子で行事を楽しみました。



オリーブ保育園

小学校の体育館を借りて、年長のさくら組が「さくらライブ」を開催。「逃走中」やリレーなど、普段の遊びを保護者に見ていただきました。



江東 Y M C A 幼稚園

10月に運動会を開催。今年も年少・年中・年長組それぞれに、園生活で出会った絵本やお話の世界をテーマにして、競技や表現を楽しみました。



しののめ Y M C A こども園

今年もまた毛糸遊びの一環としてクリスマスのオーナメントを作り、保護者の協力を得て換金して全額献金します。今年は昭和大学江東豊洲病院こどもセンターに寄付することになりました。オーナメントの木組は、保護者がボランティアで作業。皆で心豊かなクリスマスを迎えられるよう願っています。



キャナルコート保育園

遠足代わりに、園庭の菜園でお芋ほり。皆で育てたお芋を力いっぱい掘って、蒸しパンにしました。



芝浦アイランドこども園

密を避けて学年毎に運動会を開催。「笑顔～想いはひとつ」のテーマどおり、笑顔がいっぱいの会でした。

■ 高等学院を支えるチャリティーコンサート 飯靖子さん、飯頭さんと、生徒たちが出演



赤坂の霊南坂教会を会場に10月15日、チャリティーコンサートを開催しました。前半は飯靖子さんのオルガンと飯頭さんのヴィオラが、礼拝堂を素敵な空間にしてくれました。後半は生徒有志が演奏。トーンチャイムとギター伴奏による「アメイジンググレイス」、オルガンとコラボでの「主よ人の望みの喜びよ」にチャレンジしました。またオリジナルの台本による「ピーターと狼」は、ピアノ演奏に合わせてナレーションするという難しい役にも挑戦。2週間の練習期間しかありませんでしたが、力を合わせて仕上げる事が出来ました。受付係や司会も生徒が行い、良い経験ができました。緊張していた生徒たちですが、終わった後の笑顔や「楽しかった!」のコメントを聞けたことは嬉しいことでした。来場者は70人を超え、益金は17万円になりました。たくさんのご支援ありがとうございました。当日の動画は1月末日まで配信しています(1,000円)。ご希望の方は下記からお申込みください。



<https://forms.gle/KW2tEML3E5eNeweF7>

(高等学院 吉岡由見子)

■ 「わいわいハロウィン in しなのめ」



毎年1000人ほどの親子が参加する「わいわいハロウィン in しなのめ」は今年も新型コロナにより、写真スポットのみ設置しました。このハロウィンは、東雲という新興住宅地が子どもたちの良き故郷になるようにと願い、この地域で東京 Y M C A が運営しているグランチャ東雲やキャナルコート保育園など8つの施設が協力して実施しているものです。コロナ禍で一時は中止も検討されましたが、大変な状況だからこそ楽しいひとときを提供したいと考え、10月25日～29日、手作りのフォトスポットを4カ所設置。買い物帰りの親子連れや保育園・学童クラブの子どもたちなど約200人の親子が写真撮影を楽しみました。景品もなく静かなイベントでしたが、ご家族のハロウィンの1ページに加えていただけたものと思います。



写真左＝菅儀一(東京 Y M C A 元総主事)



写真右＝齊藤惣一(日本 Y M C A 同盟元総主事)

シリーズ

資料室の窓から(113)

「敵国在留同胞対策」

本会元副総主事

齊藤 實

少し込み入った話だがお付き合い願いたい。「国」とは何か。それは「人が継続して安住できる地」を指していることばであるのか。今年11月13日、東京新聞朝刊のコラム「筆洗」は、旧ソ連のベラルーシが中東からの難民をポーランド国境の寒風の森に移送して、EUに混乱をもたらす「人間の盾」としてしていると報じた。「一つの国の人びとのあるべき居場所」をめぐる痛ましい現実である。

日曜の夜、私は、TBSテレビの「日本沈没」を視ている。1973年、小松左京の初版本の行間に、更に翌年放映のテレビ画面に心が疎んだ記憶がある。今回もまた、大地が割れ沈むこの国土から人びとを脱出させる日本政府の求めに対する「諸国」の向き合い方に戦慄を覚える。

さて、こうした私の「国」とは何か」という心の奥の問いは、突如、私を「Y M C A の歴史」に導く。それが、資料室の作業である。偶然手にした資料が、諸国で暮らしていた日本人を「敵国在留同胞」に変えたあのアジア太平洋戦争時の諸文書だったからである。諸外国に住む「わが国民」がどのように「居場所」を確保できているかを案じた文書綴であった。1944年11月17日、財団法人海外同胞中央会理事長・海軍中将田中鐵二郎から「東京基督教青年会御中」で届いた「敵国在留同胞対策」がその文書である。対策案を示す「北米、布哇及カナダ在留同胞」の項には、「在留同胞ノ危機ハ平和克服時ニアリ、即チ財産ヲ全ク失ヒ且衣食ノ途ヲ失ヘル同胞ハ路頭ニ迷ヒ奴隸的境遇ニ墮スルモノト想像サル依テ之等同胞ヲ収容スベキ移民地

等ヲ共栄圏内ニ準備スルモノトス」とある。つまり敵国となつた諸外国にいる日本人が奴隷状態にならぬよう移民地を準備したので、Y M C A に協力してほしいというのである。この対策案は、「印度、豪州、中南米在留同胞」にも及ぶ。「政府ノ措置ニ側面的ニ協力」するこの企てに参加していたのは「日本ビルマ協会」「日印協会」「ラテンアメリカ中央会」など21団体で、「東京基督教青年会」は常任委員として総主事菅儀一を送って深く関与していた。

ちなみに、敗戦直後、「在外軍人・軍属・邦人650万人」の日本国への引揚げ事業を担った厚生省「引揚げ護持の初代長官」は、日本 Y M C A 同盟総主事を休職して就任した齊藤惣一であったことを学び直した。